

間)は、大動脈弁狭窄による心不全(11年11か月)、肝不全(12年8か月)、肝腎症候群(1年4か月)だった。死亡例は全例で死亡前2年以内にEGV破裂していた。脾臓及び肝臓体積は経過中に増大傾向を示したが、死亡例では末期に両臓器の縮小傾向を認めた。

【結論】脾腫に相応した血小板数の減少がみられない場合、MPNを疑う必要がある。EGV破裂を契機に肝不全死する例があり、厳格なEGV管理が重要である。また肝臓、脾臓体積の経時的測定は予後予測に有用である可能性がある。

43 BCAA 製剤の味覚評価の検討

～アドヒアランス向上のために～

佐久間 愛・鈴木 光幸・石川 達*
阿部 聡司*・小島 雄一*・堀米 亮子*
佐野 知江*・岩永 明人*・関 慶一*
本間 照*・吉田 俊明*

済生会新潟第二病院薬剤部
同 消化器内科*

【目的】BCAA製剤であるリーバクト配合経口ゼリーは、味覚面から服用しにくいとの意見も聞かれ、アドヒアランス向上のため服薬しやすい方法を検討する必要があった。そこで、成分栄養剤専用フレーバーを用いてアンケートを実施し、服用のしやすさを評価し、更に顆粒剤との比較を行ったので報告する。

【方法】医療従事者とBCAA製剤を内服中の患者計81例を対象に、顆粒、フレーバー無しのゼリー、成分栄養剤専用フレーバー10種類を添加した各ゼリーの全12種類をそれぞれ服用してもらい、5点満点の採点表を用いてアンケートを実施した。各々味覚評価を行い、性別、年齢別において比較検討した。

【結果・考察】全例味覚評価では、フレーバー無しのゼリーは顆粒より低い評価であったが、フレーバーを添加することで顆粒より高い評価を得ることが出来た。現在、リーバクトゼリー専用フレーバーは1種類のみの提供だが、成分栄養剤

専用フレーバーを利用し、患者の嗜好に応じたフレーバー選択もアドヒアランス向上のために重要である。

44 各種肝疾患における肝細胞ロゼット形成の臨床的意義

野本 実・上村 博輝・土屋 淳紀
寺井 崇二・松田 康伸*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野
新潟大学医学部保健学科*

【目的】自己免疫性肝炎(AIH)は様々な病態をとり、臨床経過・検査データでの診断が困難な場合には肝の形態学的診断が必要となる。本検討における究極の目的はAIH特有の病理組織像を明確化する事であるが、今回は肝細胞ロゼット形成を中心とした検討を行った。肝細胞ロゼット形成については従来、門脈域周囲の病変として理解されてきたが、最近では肝実質の再生性変化としての報告がみられ、従来の考えでは欧米との理解の齟齬が問題となるため今回明らかにしたい。

【方法】肝生検によって得られた標本をパラフィン包埋後、ヘマトキシリン・エオジン染色、鍍銀染色などを施し、門脈周囲および肝実質内の肝細胞ロゼット形成を観察・数値化し、検討を行った。観察方法としては、最近、当科で施行した肝生検300例を患者背景をブラインド化した後、光学顕微鏡下での組織学的検討を行い、組織データと臨床データとの照合を行った。抗核抗体は対応抗原が明らかでないとの理由から国際診断基準ではELISA法ではなく蛍光抗体法を採用しているため、蛍光抗体による測定を行った。

【成績】300例の内訳はAIH 39例、PBC 26例、AIH-PBC overlap 4例、NASH 36例、脂肪肝 8例、AIH-NASH overlap 3例、慢性C型肝炎(CH-C) 68例、慢性B型肝炎(CH-B) 18例、C型肝炎硬変(LC-C) 34例、B型肝炎硬変(LC-B) 28例、薬物性肝障害 23例、急性肝炎 5例、その他 8例であった。肝細胞ロゼット形成は54例(AIH